

すがもらいぶらり

2023年5月5日 栄鴨図書館発行

吹き抜ける風が心地よく爽やかな季節となりました。すがもガーデンの野菜もすくすくと成長しております。豊島区立栄鴨図書館では異動のため、館長や司書の入れ替わりがあり新体制でスタートしております。新職員は**初心者マーク**を付けて奮闘中です。みなさまに愛されるにぎやかな公共図書館を目指し、引き続き職員で力を合わせて参ります。

(館長)

バッジの秘密

「研修中です」以外にも2つのバッジがあるのをご存じでしたか？

緑は、一般書（大人の本）担当の司書、
赤は、児童書担当の司書

です。お気軽にお尋ねください。



じぞうくん

「研修中」バッジをつけて一生懸命な新人さんたち、心から応援しています！

イラスト作 S

5月の行事

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
	休館					
7	8	9	10	11	12	13
新刊お話し会						
14	15	16	17	18	19	20
新刊お話し会		赤ちゃんお話し会				
21	22	23	24	25	26	27
新刊お話し会					休館	
28	29	30	31	30	31	
新刊お話し会						

この日は、「おそとでわくわくおはなし会」すがもガーデン（栄鴨図書館前庭）で11時からします。雨の場合は、地下会議室で行います。

<日曜> 新刊本を出します。新刊コーナーにご注目！毎週11時から、幼児から小学生低学年向けのお話し会があります。

<火曜> 第3火曜日11時から、赤ちゃん向けお話し会があります。

編集後記

「すがも自然絵巻」を始めた時は、コロナ禍真っ最中でした。みんなで集まって繋げたかった制作会も緊急事態宣言で集合できないままでした。

それから3年余りを経て、四季の絵巻が揃い、コロナも5類になることが予定されていることを思うと、色々感慨深いものがあります。

プロジェクトを支えてくださった齋藤先生、鈴木先生に感謝です。(M)

すがも自然絵巻 完結編

絵本作家齋藤禎先生を講師にお招きし、2020年から続けてきた「すがも自然絵巻」の春編が完成しました。このプロジェクトは、「**栄鴨にも自然があることに気づいて欲しい**」という、齋藤先生と図書館の思いが繋がって生まれたものです。

「冬」→「秋」→「夏」→「春」と続けてきて、完結編の春制作にあたっては、**植物観察家の鈴木純先生**を講師に迎え、自然観察会も実施しました。参加者の方には、四季すべてご参加くださった方もいらっしゃいます。

現在「春」編は、図書館入ってすぐ正面に、5月26日まで展示しており、その後は「夏」・「秋」・「冬」編が展示してある地下ギャラリーで展示予定です。是非ご覧になってください。



略歴：徒歩10分の道のりを100分かけて歩く「まちの植物はともだち」観察会を実施している。著作は『まちの植物のせかい』『種から種へつながるお野菜の一生』『まちのしょくぶつのはなし』等

鈴木先生プロフィール

齋藤先生プロフィール

略歴：1981年豊島区生まれ。武蔵野美術大学で日本画を学ぶ。大学在学中に絵本製作を始める。豊かな色彩感覚で貼り絵やステンシルなどの手法を使って描く。絵本に『ぺんぎんたいそう』『おしりじまん』『すいぞくかんのおいしゃさん』『ながーいはなでなにをするの?』など。

食いしん坊司書の部屋



今回登場の司書は、食べるだけの食いしん坊ではなく、元作り手のプロ！プロならではの話が聞けました

みなさんは、洋菓子を作る場所についてどういったイメージをお持ちでしょうか。一般的には、整理整頓されていて清潔なイメージかと思いますが、実際にそれはその通りです。これは菓子製造に限らずだと思いますが、異物混入の可能性があるような物の置き方や作業の仕方は決してしないようにしています。また、作業手順に関しても製品を作り終わってから片付けを始めるのではなく、製造と片付けを同時進行で行い、作業台に置く器具や材料を極力減らして、危険性や失敗を減らすとともに作業を円滑に行えるように気を付けています。そのため、これは他の職業の方でも同じかもしれませんが、仕事ができる職人のコックコートやエプロンはあまり汚れません。また、器具は全て必ず毎日消毒しています。

では、清潔なこと以外は何があるでしょうか。

自分が働いていた時の印象で強く残っているのは、とにかく寒いことです。一般的に、洋菓子を作る環境は温度が低いほうが様々な作業が行いやすいため、窓や扉を開けたり、空調を使ったりして室温を下げます。温度が高い場所で作業をすると、生クリームは泡立てたそばから滑らかさを失い、絞るのも塗るのも困難になります。クッキー生地やパイ生地は、生地に含まれるバターが溶けやすくなり、それを防ぐために小麦粉を加えすぎてしまうため、生地のバランスが崩れ、粉っぽい生地になりやすい傾向があります。チョコレートを扱う際も、低いほうがテンパリング等作業の妨げになりにくいです。そして何より、品質管理の上で温度が低くないと製品も材料も足が早くなります。

しかしそんな中でも、職人たちは袖を捲り作業を行っています。それはずっと動き通して寒さを感じにくいということもありますが、細工を凝らして仕上げた洋菓子に袖が触れ、万が一にも壊してしまうという可能性をなくするという、製品に対して真剣に向き合う姿勢の表れでもあるのです。(D)

参考図書

『お菓子はすごい!』
柴田書店/編 菅又亮輔/ほか著 柴田書店(596)
『ケーキ屋さん・カフェで働く人たち』
嶺智優子/著 ベリかん社
※中央・上池袋・目白図書館に所蔵しています。
『プロフェッショナル仕事の流儀 1』
茂木健一郎/編 NHK「プロフェッショナル」制作班/編 日本放送出版協会
※中央図書館に所蔵しています。

すがも ライブラリアの「ほんだな」



第2回目のテーマは「3つの袋」

前回のMさんのテーマが「夫婦」。よぎったのが、15年以上前に出席した、恩師の結婚式だった。そのときのスピーチで、いまだ心に残っているのが、「3つの袋」の話だ。諸説あるようだが、その時出たのは、「給料袋」「堪忍袋」「おふくろ」だった。簡単にまとめると、結婚生活を続けるには「給料袋(お金)」「胃袋(ごはん)」「おふくろ(お互いの両親)」を大事にしないとイケないぞ的な話だった。

時代を感じるが今にも通じる、味わいのある小話だ。

せっかくなので、その袋にまつわる本を紹介していきたい。「給料袋(お金)」というと日本の昔話『たのきゅう』。芝居の役者「たのきゅう」が病気の母に会いに行く途中、大きなうわばみに出会うのだが…。「まんじゅうこわい」も良いが今回は「お金」ということで。

「胃袋」というと、安房直子さんの『ねこじゃらしの野原』にある、「すすめのおくりもの」というお話。これを読むとお稲荷さんが食べたくるので、ぜひ用意してから読んでほしい。

「おふくろ(両親)」というと、たくさん、ある。みなさんもタイトルがあがるのではないかな。今回は、『ラヴ・ユー・フォーエバー』を紹介したい。そして読むのでなく、聞いてもらいたい。身近にいる人に頼んでみてください。

(N)

「ほんだな」で紹介した本

- 1) 『たのきゅう』
小沢正/文 太田大八/画
教育画劇 (E2 タノ)
- 2) 『ねこじゃらしの野原』
安房直子/作 菊池恭子/絵
講談社 (ア)
- 3) 『ラヴ・ユー・フォーエバー』
ロバート・マンチ/作 乃木りか/訳
梅田俊作/絵 岩崎書店
※中央図書館に所蔵しています。

俳句はじめてみませんか ～都会を詠む～

俳句は四季を詠むので、山野に足を運んで句作をすることが多いです。ですが、都会にだって四季はある！(当たり前!)ということで、今回の俳句コーナーのテーマは「都会を詠む」です。まずは今月の一句をご覧ください。

ニューヨークで詠んだと云われる一句です、作者の鷹羽狩行(昭和5年生～)はウィットに富んだ作風で、特に海外詠が多いことでも知られています。

高層ビルより見下ろすマンハッタン、新緑をパセリになぞらえることで、街並みも白い皿に盛られた料理のように見えてきます。軽やかで新鮮な表現です。季語は日本の四季を表した言葉なので、一般的には海外詠は難しいとされています。ですが旅行記のつもりで気軽に詠んでみてはいかがでしょうか。心に残る句ができるかも。

しぐるるや駅に西口東口 安住敦

俳句って読んで「だから何?」という事が多くて、よく分からない、と言われることがあります。確かにこの句もその類なのでしょう。駅に西口東口?だから何?と。俳句は17音の余白に詩情が宿るものです。俳人はひとつひとつの言葉が生む波紋に気を配ります。

舞台は池袋のようなターミナル駅ではありません。西と東が見通せるぐらいの小さな駅で、時雨がやむのを待っている人々。これが北口南口では詩にはならなかったでしょう。説明することのできない微妙な言葉選びを楽しむのも、俳句の醍醐味です。

表参道A5より出て鳥雲に 今瀬剛一

同じように駅を詠んでいても、だいぶ趣が違いますね。具体的な駅の名前を出すことで、鮮やかな句になっています。地名を効果的につけた俳句を探してみるのも楽しいですね!(M)

おすすめ本

『アルゼンチンに渡った俳句』
井尻香代子/著
丸善プラネット(961イ)

『俳句は国境を越えて
—One - Poem One - World—』
西川盛雄/著 弦書房(911.3二)

今月の一句
摩天楼より新緑がパセリ狩行ど